

資料 1 - 1

北海道防災会議地震火山対策部会
火山専門委員会資料

令和3年7月29日
札幌管区気象台

(目次)

アトサヌプリ	1 ~ 8
雌阿寒岳	9 ~ 25
大雪山	26 ~ 29
十勝岳	30 ~ 45
樽前山	46 ~ 55
倶多楽	56 ~ 66
有珠山	67 ~ 78
北海道駒ヶ岳	79 ~ 84
恵山	85 ~ 91

ア ト サ ヌ プ リ

札幌管区气象台
地域火山監視・警報センター

○火山活動評価

火山活動は静穏に経過しており、噴火の兆候は認められません。

○噴火警報・予報及び噴火警戒レベルの状況、2020年7月～2021年6月の発表履歴

変更なし	噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）
------	----------------------------

○2020年7月～2021年6月の活動概況

・噴気などの表面現象の状況（図1、図2-①～③、図3～8）

監視カメラによる観測では、F1噴気孔群及びF2噴気孔群の噴気の高さは火口上400m以下で、噴気活動に変化はありませんでした。

8月24日から27日にかけて実施した現地調査では、アトサヌプリ溶岩ドームに点在する噴気孔や熊落とし火口の状況に変化はなく、赤外熱映像装置による観測でも地熱域の状況に特段の変化はありませんでした。

・地震及び微動の発生状況（図2-④～⑥、図9）

火山性地震は少なく、地震活動は低調に経過しました。2021年6月15日、17日に発生した地震で、弟子屈町サワンチサップで最大震度1を観測しています。

火山性微動は観測されませんでした。

・地殻変動の状況（図10）

GNSS連続観測では、アトサヌプリカルデラを囲む基線で収縮の変化が引き続き認められています。



図1 アトサヌプリ 北東側から見た山体の状況（北東山麓監視カメラによる）

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/kaisetsu/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、北海道大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所及び公益財団法人地震予知総合研究振興会のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』、『電子地形図（タイル）』を使用しています。

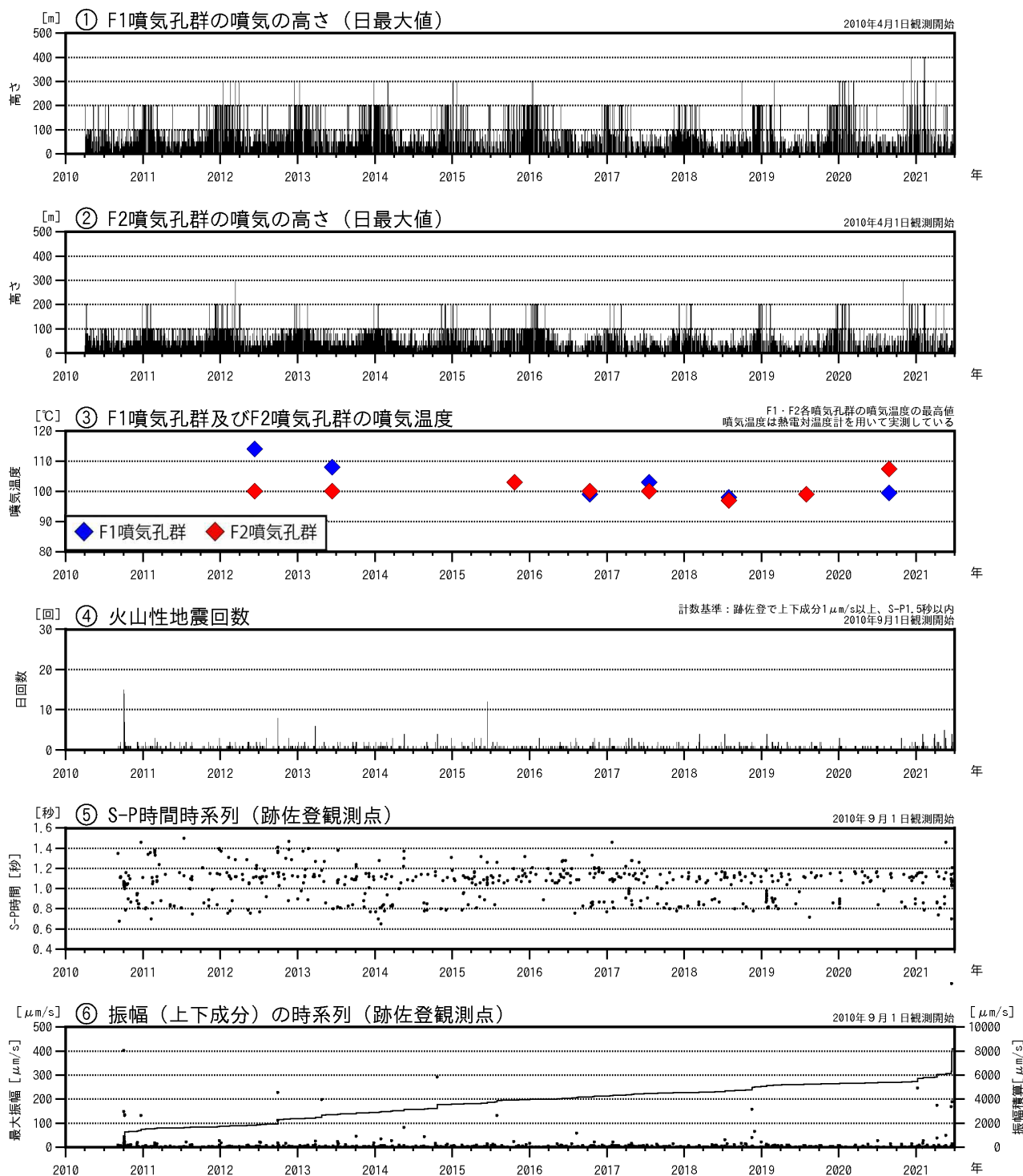


図2 アトサヌプリ 火山活動経過図 (2010年4月～2021年6月)

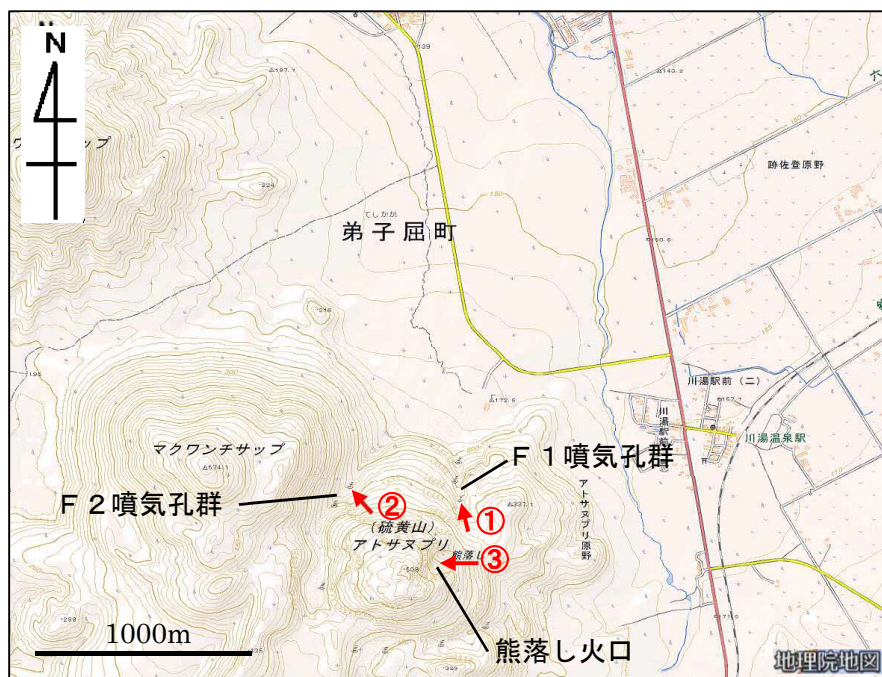


図3 アトサヌプリ 周辺図と写真及び赤外熱映像の撮影方向(矢印)

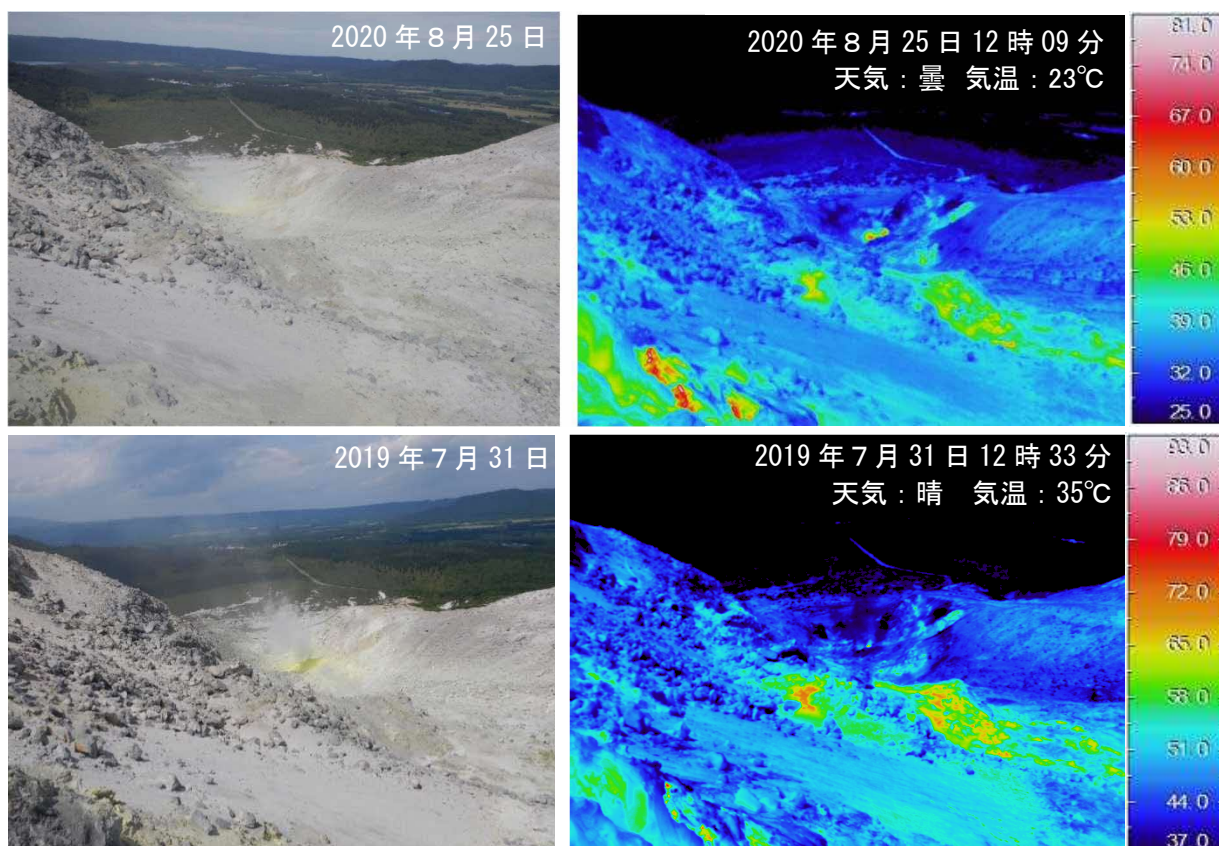


図4 アトサヌプリ 赤外熱映像装置によるF 1 噴気孔群の地表面温度分布
(図3の①から撮影)

- ・前回(2019年7月)の観測と比較して、地表面温度分布に特段の変化はありませんでした(2019年7月の地表面温度分布は、噴気の影響で地熱域を捉えられていない箇所があります)。

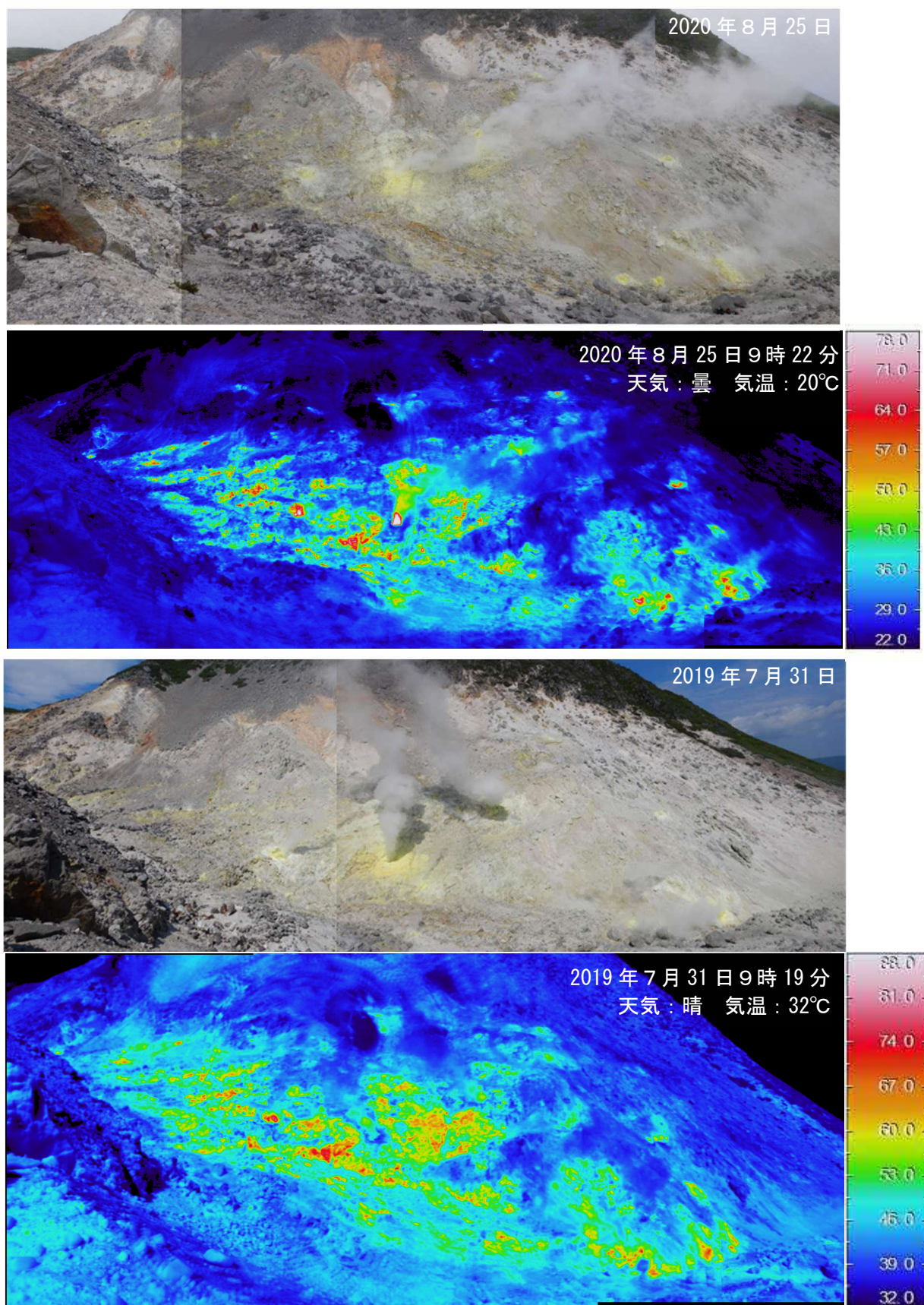


図5 アトサヌプリ 赤外熱映像装置によるF2噴気孔群の地表面温度分布
(図3の②から撮影)

・前回(2019年7月)の観測と比較して、地表面温度分布に特段の変化はありませんでした。

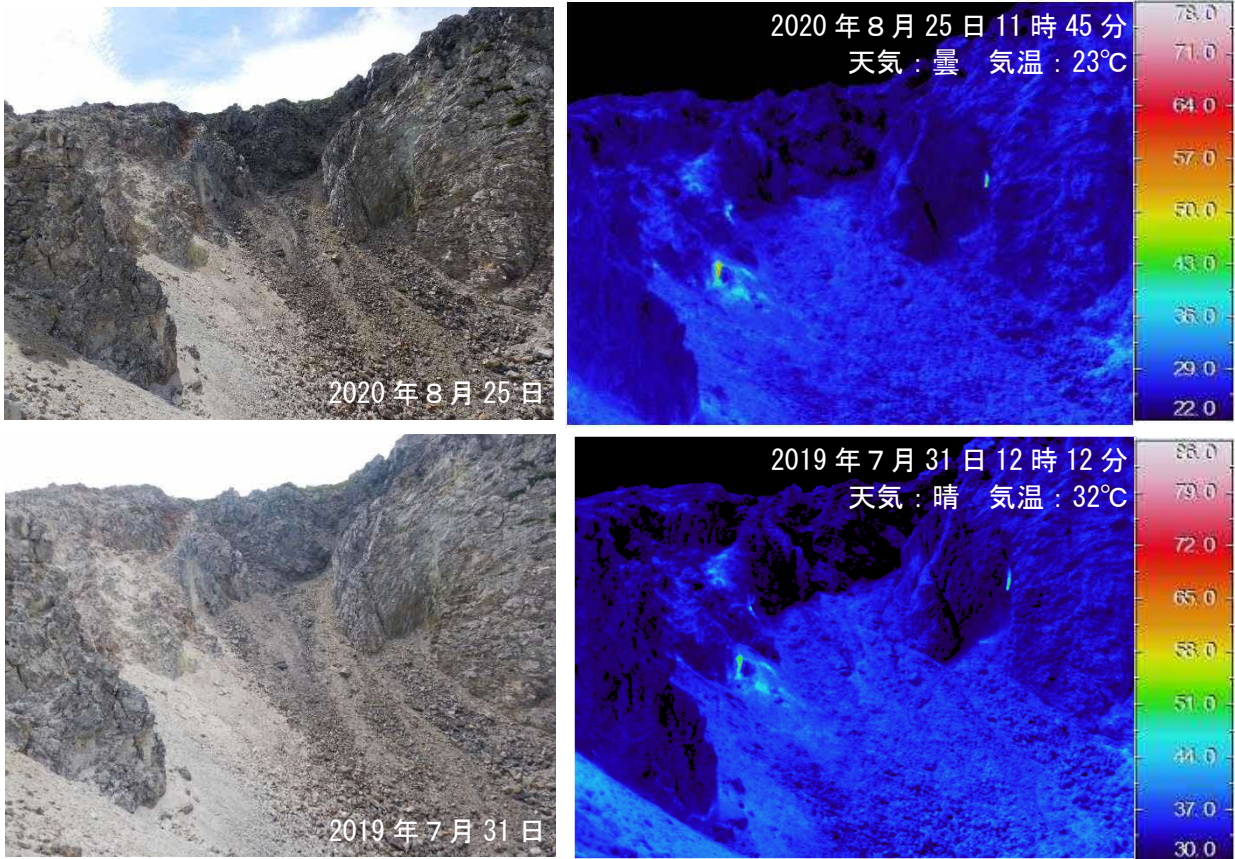


図6 アトサヌプリ 赤外熱映像装置による熊落し火口の地表面温度分布
(図3の③から撮影)

- ・ 前回 (2019年7月) の観測と比較して、地表面温度分布に特段の変化はありませんでした。

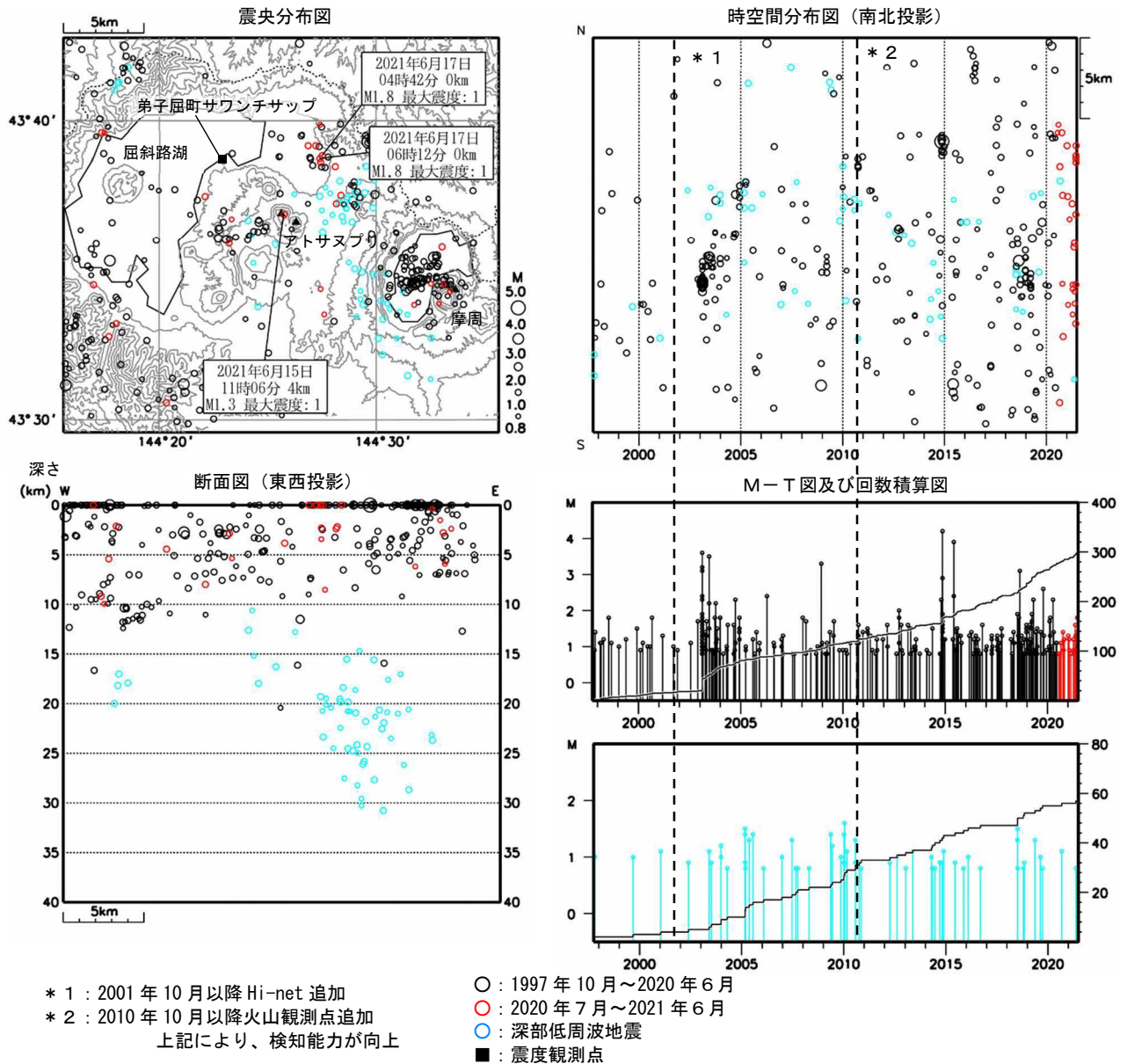


図7 アトサヌプリ 一元化震源による周辺の地震及び深部低周波地震活動

(1997年10月～2021年6月、 $M \geq 0.8$ 、深さ40km以浅)

2020年9月以降の震源は、地震観測点の標高を考慮する等した新手法で求められています。2020年4月18日から10月23日までの地震について、暫定的に震源精査の基準を変更しているため、その前後の期間と比較して微小な地震での震源決定数の変化(増減)が見られます。

- ・今期間も概ねこれまでと同様の領域で地震が発生していました。

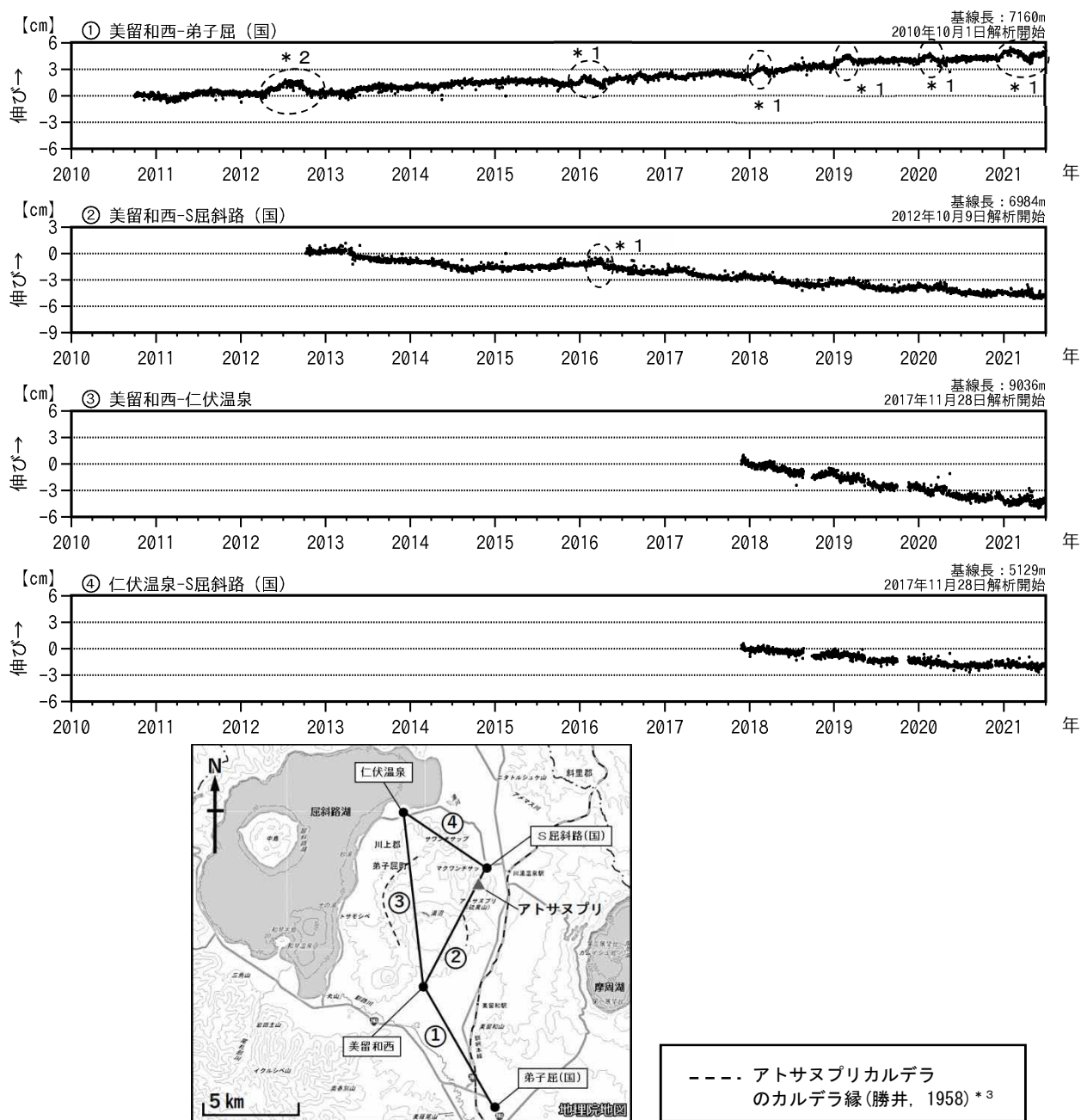


図8 アトサヌプリ GNSS連続観測による基線長変化(2010年10月~2020年6月)及び観測点配置図

①~②の黒破線円内の変動(*1)は、美留和西観測点の局所的な動きによるもので、火山活動によるものではないと考えられます。
 ①の黒破線円内の変動(*2)は、弟子屈(国)付近の樹木の影響及び伐採(2012年9月下旬)によるものです。
 GNSS基線の空白部分は欠測を示します。
 *3 勝井義雄(1958)阿寒・屈斜路火山群、地球科学、39巻。

・アトサヌプリカルデラを囲む基線②~④で収縮の変化が引き続き認められています。

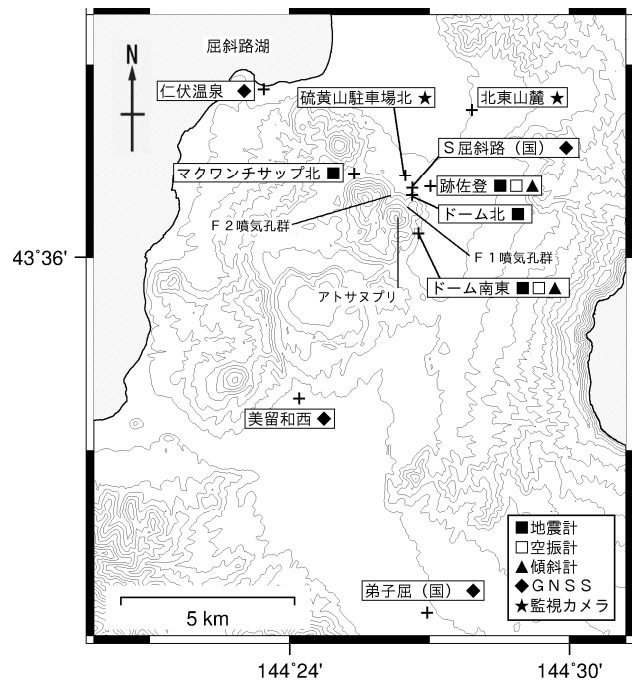


図9 アトサヌプリ 観測点配置図

+印は観測点の位置を示します。
気象庁以外の機関の観測点には以下の記号を付しています。
(国)：国土地理院